

牧野文夫先生の定年退職をお祝いして

経済学部長 廣 川 みどり

牧野文夫先生、定年退職おめでとうございます。

法政大学経済学部に教授として赴任されたのが2008年4月ですので、それから14年間ご一緒させていただいたということになりますが、先生とご一緒させていただいた時間には濃度の高さを感じ、もっと長い期間いらっしやられたような感覚を持っています。

牧野先生は、一橋大学大学院経済学研究科博士後期課程を1981年3月単位取得満期退学され、その後、電力中央研究所研究員、東京学芸大学で助教授・教授を務められました。この間、1995年には一橋大学より経済学博士号を取得され、2008年に法政大学経済学部に教授として赴任されました。法政大学にいらっしやられてからは、2010年4月～2012年3月に比較経済研究所所長、2013年4月～2015年3月に経済学部長、2017年4月～2019年3月に通信教育部長、2020年4月からは多摩図書館長としてご活躍いただきました。

法政大学経済学部でのご在籍14年間の約6割が「長」の期間で、経済学部が牧野先生のお力におすがりした日々であったこと、これが前に述べた「濃度の高さ」を感じた理由のひとつかと思われました。そして、役職だけではなく、経済学の基幹科目というべき「日本経済論」「経済史」の科目のご教授に当たられ、学部・大学院・通信教育で多くの学生の指導に当たられたことも大きなことと思われます。学部の「日本経済論」「経済史」

は毎年多くの学生が受講し、先生は採点が大変だったのではないかと推察されます。牧野先生が本学でご指導に当たられた学生数は法政大学だけで1万人を超えるのではないのでしょうか。さらに、大学院では中国人留学生が多い状況で、牧野先生のご存在が大きく感じられた要因であったかと存じます。

さて、先生のご研究分野は「日本と中国の経済発展の比較」「経済発展と所得・資産分配」ということで、代表的なご著作は『招かれたプロメテウス:近代日本の技術発展』『アジア長期経済統計 第3巻 中国』となっております。分野外の廣川ではありますが、D.S.ランダスの『西ヨーロッパ工業史』の原著タイトル“The Unbound Prometheus: Technological Change and Industrial Development in Western Europe from 1750 to the Present”に呼応したように見えるタイトルに惹かれて『招かれたプロメテウス:近代日本の技術発展』をふと手に取らせていただきました。

『招かれたプロメテウス:近代日本の技術発展』は、1995年に出版されました。この時期は、バブル崩壊後、最初の「失われた10年」の真っ只中であり、日本経済が全く先の見えない状態です。そうした中、なにより実体経済を支える技術革新が経済の蘇生に資するものとして、日本の技術発展の歩みをあらためて振り返り、将来の教訓とする、さらに、それが途上国の発展にどのように活かせるか、それらの問題意識に立って記された著作です。特に、従来の伝統的経済史研究が「特殊性」や「個別性」に主に注目するのに対し、日本と欧米との経済発展パターンの「共通性」や「普遍性」に重点を置くことでバランスを取りつつ、さらに個別の産業技術特有の問題を加味しつつ、それぞれの技術進歩のブラックボックスに光を当てる意欲的な著作と拝察しました。それぞれの章では、織物業、製粉業、外航海運業、農業、家計部門などの特徴と構造が詳細に記されています。

タイトルにある「招かれたプロメテウス」の謎解きは、そのままの字面としては本書のなかには見当たりません。「日本は戦前・戦後を通じて導入技術を巧みに受入側の環境に適合させ、或いはオリジナル技術に一層の改

良を施すことによって、開国からおよそ1世紀半の今日、世界のハイテクをリードする地位にまで到達した（p.213）」という文章がおそらくヒントかと思います。天上の火を人間にもたらす、いわば普遍的な技術革新の考え方の象徴をプロメテウスとするなら、それが日本に迎えられ、日本の環境のなかで育つ、その様を、さまざまな産業の分析を通じて記述したものと感じられました。

このように魅力的な専門研究をされていていらっしゃる牧野先生ですが、教科書（共編著）も素晴らしいものを出版されています。代表的なものとしては『中国経済入門』（これは、すでに第4版まで刊行されている日本でもっとも多く採用されている中国経済のテキストとのこと）、『キャリアと労働の経済学』（労働経済学の入門テキスト、これも初版を売り尽くし、今年早々には第2版出版とのこと）が挙げられます。前者についてはわたしも少し拝見させていただきましたが、本著の初版より20年以上経ち、その間の中国経済・社会の変化を表すことばが4つの版の教科書の副題となっており、先生がまさしく歴史とともに研究・教育活動を進められたと感じられました。ちなみにコラムがとても楽しく、このような教科書に学生時代に会う学生を羨ましく思います。

ところで、個人的に牧野先生との思い出としてとりわけ強く印象に残っているのは、牧野先生が学部長のときに、廣川が補佐役として主任を務めさせていただいた2年間（2013年4月～2015年3月）です。牧野先生は赴任されて6年目に学部長に選任・就任されました。通常、学部長には、長年勤務した教員が選ばれます。大きな組織での制度や人間関係を把握しつつ、個別の事態に対処していくのは、ただでさえ難しいことと感じます。執行部会議は、いつもニコニコ顔の牧野先生中心にまったりと進んで、にも関わらず、大きな案件が教授会で次々に承認されていくのを見て、牧野マジックと感じていました。また、最後は牧野先生にお任せすればよい、という絶対的な安心感がありました。そのときは「マジック」と感じられたことが、その後、自分自身が学部長に就任し、執行部会議や教授会に持

ち込むまでに、いかに牧野先生がお気を遣われたか、身に沁みて感じる今日この頃です。年末に研究室の掃除をしていたら、過去のカリキュラム改革での膨大な資料が出てきて、牧野先生がひとつひとつ丁寧に対処されたこと、改めて思い出されました。案件満載の執行部で本当に大変でしたが、任期を終えたあと、先生のお宅にお邪魔させていただき、奥様の美味しい手料理と愛犬マロンちゃんの大歓迎をいただいたことが楽しい思い出です。

ところで、今回巻頭言執筆にあたり、牧野先生にあらためてご趣味を伺ったところ、ご趣味のひとつが「バリエーション登山」とのこと。ネーミングは牧野先生オリジナルなのでしょうが、伺うに「一般的登山ルートから外れたコースからの登山」で「国土地理院の2万5千分1の地図、コンパスおよびスマホのGPS機能などを使って、地図上で自分の位置を確認しながら登山します」とのことでした。ワクワクするようなお話ですが、「単独行なので、危うくルートを見失うことも時々ありました」とのこと…なんて危険なのでしょう！ わたしが家族でしたら、ぜひともやめていただきたいところです。と思うとともに、ある意味、学者の性（さが）というか、これが牧野先生の研究スタイルなのでは、と強く感じました。ミクロの立場で実際に現地に足を運ばれる（または個々の資料にあたられる）、と同時にそれをマクロ的に俯瞰しつつ、個々の経済主体やご自身の立ち位置を再確認され先に進む、そうした集積が、先生のこれまでの豊かな成果に繋がったものと感じ、僭越ながら腑に落ちた次第です。

とはいえ、リアルバリエーション登山は、どうぞほどほどに。先生には、ますますのご活躍をいただかなくては。そして、さらにご研究を探求いただき、わたしたちへのその成果のご教授と楽しい交流へのお付き合いをいただければと存じます。法政大学経済学部のプロメテウス・牧野先生の、新たな場所でのご活躍をお祈りしています。